
人間製作所

白 一梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間製作所

【Nコード】

N2196W

【作者名】

白 一 梅

【あらすじ】

気づかなかった。いつのまにか俺は一人になっていた。まぶたの裏に残る最後の光景は“俺”だった。

おかしい。 なにかがおかしい

少年がそう気付いたときには、時すでに遅し。
全てが手遅れとなってしまうていた。

全てを知ったとき、少年は独りなんだ、とようやく気付いた。

「なあ、^{らいと}夜月！ 今日、一緒に帰らね？」

H R 後

ガヤガヤと騒がしい音のする教室の中。
俺を呼ぶ声が、俺の耳に入ってきた。

「ああ。」

俺は、声の主を見て、質素な返事を返す。

俺に声をかけたのは智樹^{ともき}っていう俺の親友だった。

俺は、クラスの中でも結構おとなしいタイプの人間だ。

周りの人から言くと、クール・・・らしい。

俺にはよく分からないが、自分が、好奇心の薄い人間で、あまりしゃべる方でないのは自覚があった。

俺は、誘われるまま、智樹と一緒に帰宅した。

「ただいまー。」

俺は、玄関で靴を脱ぎ捨て、スリッパを履く。

「おかえり！ おにいちゃん。」

まっすぐ伸びた玄関の奥にあるリビングから、妹の慧^{けい}がヒョッコリと顔を覗かせた。

「お帰りなさい、夜月。」

妹とは違って、声だけを聞かせる俺の母。

その二人に向かって、俺は再度「ただいま。」と口にした。

「おにいちゃん、あそぼーよ！」

良くなつてくる妹の慧は、俺にとって珍しく可愛いと思える一人だ。

昔から、俺のあとをついてくるのが大好きで、俺の言うことをよく聞く年の離れた妹は、

俺にとって、とても大切な存在だ。

だが・・・。

「悪い、今日は塾があるんだ。　また、今度遊ぼうな。」

あいにく俺は中学3年生であり、受験生でもあるのだ。

なかなか慧に構ってやる時間ができない。

慧は、そんな俺に対して、まだ5歳。

5歳といえば、小さくて、まだまだ人に甘えたい、年齢だ。

だが、慧は違う。

さすが、俺の妹、聞き分けのある、理解のある子供に育った。

5歳児とは思えない。

人の状況を理解して、迷惑をかけないように動けるのだから。

「そつかあ。　じゃあ、おにいちゃん。　こんど、いつしよにあそ

ぼうね。　やくそく、だよ！」

ほらな。

駄々をこねないだろ？

慧はそこら辺の子供とは違って分別があるんだ。

俺は、小指を差し出す慧に、微笑みながら自分の小指を差し出す。

「ゆーびきーりげーんまん、うーそつーいたーら、はーりせーんぼーん、のーますつ。　ゆーびきったー！」

小指をほどくと、慧はにつこりと笑ってから「おかあさん。」と言って、リビングに駆け込んでいった。

俺は、その様子を見てから、2階にある自分の部屋へと向かった。

部屋に着いた俺は、鞆をそこら辺に放り投げて、塾用に教科書を詰め込んだバッグを肩に掛ける。

そして、机に置いてあった腕時計を手にとって腕につけながら、階段をおりてゆく。

リビングに向かって、冷蔵庫の中からペットボトル容器に入った500mlのコーラを持ち出して、

バッグに詰め込んで、俺は「いってきまーす。」と家を飛び出した。

・・・疲れた。

俺は多少疲労感を感じながら、自転車をこいで、家へと向かう。

空を見上げれば、すでに暗くなっていて、満月が道を照らしていた。今日は、特別講習もあり、四時間の授業プラス一時間で、普段よりも気力を使い、

疲れてしまった。

別に勉強が嫌いと言うわけではないのだが、ずっと集中して授業をきくのはそれなりに疲れるのだ。

家に帰る道の途中、自動販売機の隣にゴミ箱があったので、俺は、ゴミ箱の前で自転車を止めた。

そして、すでに空になったコーラの容器を捨てる。

さつさと家に帰ろう、と自転車を漕ぎ出そうとした俺を、偶然耳に入った男の言葉が引き止める。

「黒堂家が、最後の生き残りです。」

男は、声からすると若そうな声をしていた。

そして、その声は、悪事を働いているのを隠すような、低く囁く声。でも、それ以上に俺は男の言葉に反応した。

『最後の生き残り』

いったい、どういう意味なのだろうか？

それも気になるが、一番気になるのは……。

『黒堂家が、最後の生き残りです。』

黒堂家

俺の名前は黒堂夜月。

黒堂。

これって、そんなにたくさんあるような苗字じゃないだろ？

俺の被害妄想だって分かっている。

そんな滅多な確立で、知らない人が自分の話をしているところに居合わせたりするということはおきないだろうから。

でも、俺の中では、黒い靄もやが溜まっていった。

嫌な予感がしたのだ。

……どうしようもなく。

せめて、顔を確認しておこう。

俺は、そう思っつて、声のしたほうに向かつてみる。

今思えば、何故そんなことを思っつたのか、不思議だ。

顔を確認して、家族に知っつている人がいるかどうかを確認したかつたのかもしれない。

自販機の近くにある曲がり角の方向から、声が聞こえたはずだ。

俺は自転車に乗りながら曲がり角を曲がる。

俺の聞き覚えのない声だから、俺の知り合いじゃないはずだ。それに、あの会話からして、俺の家のことだとは、思えない。

俺が曲がり角を曲がると、そこにいたのは携帯を片手に持っつた若い男だつた。

男は、さっきの一言で会話が終わつたのか、携帯をポケットの中に入れていた。

そして、俺とバッチリ目があつた。

声からした予想通り、若い男だつた。

黒い短髪をしていて、グレーのスーツを着ていた。

顔は、いかにも若者という雰囲気を持っつており、仕事熱心というイメージが浮かぶような顔をしていた。

男は、自転車をこいで横を通る俺を、凝視していた。

口元には、うすい笑みを浮かべている。

小さくつぶやく男の声。

それは、薄暗い路地の中に溶けていった。

俺は、悪寒がして、猛スピードで自転車をこいだので、男とはすぐに距離ができた。

それでも悪寒が止まらなかった。

だから、一番近くにあった曲がり角をまがった。

男の姿が見えなくなっても、俺は安心できなかった。

全速力で、自転車をこいだ。

怖い。

俺は、男に対して恐怖という感情を抱いた。

『やあ、黒堂君。』

男が俺に向かって呟いた言葉。

俺の家のことを言っている。

あの男の言ってた黒堂は、俺の家族のことだ。

あれは、一体どういう意味なんだ。

何がしたい。

あんな男、俺は知らない。

一体誰なんだ。

俺は、自転車をこぎながら、頭の中に浮かぶ次々の疑問の答えを捜し求めた。

だが、俺がその答えを知っていないから浮かぶ疑問であって、俺に答えは出せなかった。

「はあ、はあ・・・。」

俺は、息を切らしながら、目の前にある小川を見る。

男に見つからないように、とにかく複雑な道を選んで自転車をこいでいたら、小川の近くに来てしまった。

ここは、俺の家というより、俺の学校に近い場所だ。

小川の川辺は、岩場で、そこから道路までの少しの角度がついた傾斜は草原となっていて、俺と智樹、ほかの友達とよく学校帰りにここで転がって、青空を見ながら話していた。

俺は、全速力で自転車をこいで、疲れたっていうのもあって、自転車をそこらに止めて草原に寝転がった。

考え事をするには、ここはもってこいだ。

疲れたときにも、ここにいると、癒される。

俺のお気に入りの場所でもあるのだ。

俺は、草原に寝転がって、空を仰ぐ。

雲ひとつない夜空に、満月が光る。

星は、あんまり見えない。

ここは、東京だから、空気が汚い。

俺が、じいちゃん、ばあちゃんのいる新潟に行った夜空は、満点の星空だった。

そして、空気がきれいだった。

息を吸うたびにそのことを実感できた。

胸に入ってくる空気が新鮮なのだ。

それに比べて、東京は排気ガスの匂いがする。

もちろん、場所によっては違うだろうが、東京の有名どころは、そんなものだ。

それに、本当に排気ガスの匂いがする、というわけではない。なんとなく、とでも言うのだろうか。

言葉では言い表しにくいものだ。

俺は、草原に寝転がりながら、小さく呟いた。

「あの男、なんなんだ。」

小さく呟く俺の声は、サアーッと吹いた風に掻き消される。
今は、だいぶ落ち着いたから、こうして冷静でいられる。
だが、あの男の言葉を聞いたときは、背筋が凍った。

『やあ、黒堂君。』

何故、俺の名前を知っている？

最初に浮かぶべきはずの疑問が、浮かばなかった。
一番最初に俺が感じたのは

恐怖

それ以外の感情が、浮かばなかった。
俺の体が、恐怖に支配されたのだ。
初めてだった。

恐怖という感情に駆られたのは。
俺は、迷信を信じたりはしない。
かといって信じていないということでもない。
俺に、その存在が本当にあるのかどうか、そんなの分かるわけない
し断言できるわけない。

だから、俺は幽霊のような存在に恐怖なんて、全く感じない。
興味がないのだ。

なのに、あの男には、底なしの恐怖を感じてしまった。

ただの、若い男が俺の名前を知っていて、意味のわからない言葉を発した、というだけなのに。

俺は、大きく息をすって、吐いた。
落ち着かないときによくやる動作だ。

よしっ、いくらか落ち着いてきた。

俺は、上半身を起こして、しばらく小川を見つめた後に立ち上がった。

そして、俺の自転車のもとまで歩いて行って、自転車にまたがる。
最後に、もう一度小川を見て深呼吸してから、俺は自分の家へと帰っていった。

大丈夫、これしきのことと恐怖を感じるな。
あれは、きっと家族の誰かの知り合いで、俺のことを知っていたんだろう。

俺は、『最後の生き残り』という言葉を、頭から振り払って忘れることにした。

「夜月、おはよっ!」

俺が、学校に向かって自転車をこいでいると、後ろから、智樹の声がした。

「おう。」

朝っぱらから元気な智樹に、俺は短く返事する。

「夜月、相変わらずクールだなー。もっと、笑えばいいのに。お前、笑顔、すげー可愛いのに。」

智樹がいろいろほざいているが、それらは全てシャットアウト。中には男に言っではいけない言葉もあったような気がするが、無視だ無視。

こっというのは、突っ込むとからかわれてしまう。

俺は、人にかかわれるのはごめんだし、馬鹿にされるのもごめんだ。

「夜月ー、聞いているー? お前さ、もつと笑えば、女の子も近づいてきやすいだろうに。お前がそんなんだから、お前に告白したくてもできない可哀想な女の子多いんだよ?」

「俺には関係ないし、興味もない。」

それに加えて、そんな女の子はあまりいないだろうからな。智樹が大げさに話しているだけだ。

「『俺には関係ない』って、夜月がもつと笑えば、女の子にさらに

モテるのにつて話してたんじゃん！ 夜月に関係大有りじゃんか！
関係ないってなんだよ！」

いや、たとえば俺が笑ったとしても、あまり変わらないと思う。

「夜月、信じてないって顔してる！ お前、自分がイケメンだって、
自覚あるのか？」

「……。」

俺は、返事をするのが面倒臭くて、取り合えず頷いとく。
それに、俺の顔がそこそこいい方であるのは、自覚がある。

「うわっ、むかつく！」

「お前が言ったから、頷いた。」

「なにそれ。でも、ま、いや。俺も顔、いいからね。」

「……。」

俺は、また頷く。

智樹が顔がいい、というのは本当のことだからだ。

むしろ、こいつは俺なんかよりずっと顔が良かったため、俺が反論できるわけないのだ。

「夜月、言っとくけど、俺より夜月の方が顔いいんだからな。」

「いや、それはない。」

智樹は、読心術でもできるのだろうか、とたまに思うことがあったりするが、まあいいか。

「・・・なあ、夜月。」

「なんだ。」

智樹の明るい口調が、突如かげりを帯びて、俺も真面目に話を聞く態度を取った。

「・・・なんでもない。」

「・・・？」

どうしたんだろう。

俺は、少し智樹の態度に疑問を感じながら、あまり気にしないことにした。

「おはよー、夜月。」

「おっ、夜月。はよ。」

「黒堂君、おはよう。」

俺が、教室に入るなり、いろんなやつらに挨拶される。

俺は、それに対して「おう。」とそっけない返事を返す。

だが、智樹は俺と真逆で、挨拶してくる人々に対して、明るく挨拶を返す。

よくそんな面倒くさいことができるな、と思いつつ、俺はそんな智樹を見る。

「・・・。」

智樹が、皆に対して元気よく挨拶をしている。

そんな些細なことに、俺は違和感を覚えた。

一体、この違和感の正体はなんなのか。

俺は、眉をひそめる。

静寂な、黒一色の空間の中。それは、永遠と続いている。

どこからともなく蜘蛛がするすると、糸をだして、降りてくる。

空間の中央。何もない空間の中央で、蜘蛛は這い回る。

空間の中央に完成したのは、華麗なる蜘蛛の巣。

その蜘蛛の巣に、何かが引っかかる。その何かは、儚く、脆い。

それとも、靄のようなものなのか。

蜘蛛の巣によつて、完全に捕らえられることはなかった。

暗黒の闇の中。光の一切存在しない空間。

俺には、その何かを見ることはできなかった。

黒い靄のように俺の心の中に存在する、違和感。

この違和感の正体は、俺には掴みきれないものなのだと、俺は直感で悟った。

誰もいない。

そう、その言葉のまま、誰もいないこの空間で。
俺はただ呆然と立っていることしか出来なかった。

なんで？

無表情にぼそりと俺の口から漏れたつぶやきは俺にも聞こえなかった。

自分が思わず呟きをこぼしたことに気づかず呆然と、ただ啞然

と。

目の前には鏡がひとつ。
映っているのは、俺。
瞳は暗く澱み、光がなく。

小さく右手を上げてみた。

鏡に映る俺は、左手をあげていた。

俺から見て、左手を……。

一歩、二歩、“俺”が近づいてくる。

呆然と立ちながら理解する。

この世に俺は一人なのだ。

俺そっくりに出来た機械人間アンドロイドはぎこちない動きで口の端を吊り上げる。

俺と、“俺”を囲うように、妹の慧、母さん父さん、智樹に学校のみんなが、いた。
でも、誰もいなかった。

人間は、俺を除いて、ただ一人も。

文字通り、誰もいなかった。

俺は自然と笑い出した。

理由は分からない。

ただ、なぜか笑い出していた。

そういうことが。

人知れず、政府の裏で生み出されたアンドロイドは進化しすぎて人間を

徐々に徐々に、一人ずつ仲間とすり替え世界を手に入れようと目論んでたわけだ。

あまりの現実感のなさに嘔き出しそうになった。

目の前で、“俺”も笑っていた。

（後書き）

何ヶ月も前に書きっぱなしにした文章を直しもせずそのまま引用したため

大変見苦しい文となりました；
すみません！

よって話の展開など成っていない所が多く見られますが
少しでもお楽しみいただければ光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2196w/>

人間製作所

2011年10月9日14時33分発行